処分場問題 現場を調査

那須塩原で東京の学生ら

那須疏水と産廃処分場計画との関係について話を聞く学生ら＝2日午後、那須塩原市

東京の民間業者が那須塩原市の青木地区に県内最大規模の産業廃棄物安定型最終処分場を計画している問題について認識を深めようと、国学院大経済学部(東京都)の三年生十七人が二日、現地周辺を訪れ調査を始めた。

学生らは公害史が専門の菅井益郎教授のゼミで、環境経済を履修。一昨年の同ゼミでは、旧馬頭町に計画されている県営管理型産業廃棄物処分場問題を調査した。

この日到着した学生は、那須野ケ原土地改良区連合が管理する那須疏水の落差を利用した水力発電装置などを視察。同連合の星野恵美子事務局長から、水力発電の概要や処分場計画への姿勢について聞いた。

処分場計画について星野事務局長は「埋められるごみが安定五品目といっても安全とは違う。計画地は疏水の幹水路に近く、その水は下流域で生活用水にもなる。(県が)許可できる状況ではない」と反対の姿勢を明確に示した。

学生代表の松原綾子さん(三)は「地元の人たちは予想以上に環境に配慮した活動を実践している。現場をよく見て問題意識を高めたい」と話していた。

『下野新聞』2006 年 9 月 3 日（日）